

「バックギャモン・ブック」

日本バックギャモン協会／編著 望月正行, 景山充人, 桑門昌太郎／執筆
河出書房新社 2002年10月発行
2階一般開架書架 (請求記号:798)

世界中で3億人もの愛好者がいる“バックギャモン”というゲームをご存知だろうか。本書の執筆者の望月氏、景山氏は毎年7月にモナコで開催される世界選手権に出場し優勝候補の一角に挙げられている人物だ。ゲームのルーツは紀元前3000年頃の古代エジプトで、日本には飛鳥時代に伝来したと言われ「盤双六」の名称で親しまれた。「二人で対戦し専用のゲーム盤・駒・サイコロを使うこのゲームは『スリル・スピード・逆転のゲーム』と呼ばれ1試合に5～15分しか要しない。ルールはシンプルでコツをつかめば初心者が上級者に勝つこともあるが、その戦略は驚くほど奥深く真の勝者となるにはかなりのトレーニングと経験が必要」と執筆者の景山氏は語る。

本書は子供から大人まで、また初心者から上級者まで誰でもがこのゲームを楽しめるよう編集されておりゲーム解説の合間には歴史やエピソードも満載だ。インターネットが普及した現代では対戦相手が目の前に居なくてもパソコンがあればソフトウェアと勝負が出来るしインターネットで世界中のプレーヤーとの対戦が可能、とも紹介されている。この本を手にとって映画のワンシーンのように頭脳ゲームを楽しんでみてはいかが？

「四国遍路」

辰濃和男／著 岩波書店 2001年4月発行
2階郷土開架図書 (請求記号: K/186/161)

近年、気候のいい時期になると高知市周辺でも多くのお遍路さんを見かけるようになった。バス遍路や車遍路も盛況ではあるが、白衣に金剛杖を持ち、歩いて四国八十八ヶ所都合1300km余りを踏破する人々の数が年々増えているという。各書店にも遍路関係の書籍を集めたコーナーが設けられている。

空前の「遍路ブーム」に火を点け、四国路に多くの善男善女を呼び込むきっかけを与えた書籍の一つが本書である。実際に70日あまりを費やし四国路を歩いた著者は朝日新聞の元論説委員。長く「天声人語」を担当した経験がそうさせるのか、美しく、時には厳しい一面も見せる四国の自然や人々との触れ合いを、簡潔ながら臨場感あふれる筆致で伝えている。また、随所に垣間見える著者の長い経験に裏打ちされた世の中の見方、感じ方、行動様式等々は、「人生」を考える上でも多くの示唆を読者に与えてくれる。

いつかきっと弘法大師と「同行二人」……。読後、そんな気持ちさせられたのは私一人ではないだろう。